

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | |
|------|-------|---|
| 報告番号 | ※ 甲 第 | 号 |
|------|-------|---|

氏 名 柳 朋宏

論 文 題 目

An Internal and External Syntax of Noun Phrases in the History of English

(英語史における名詞句内部と外部の統語論)

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 田中 智之

委員 名古屋大学教授 大室 剛志

委員 名古屋大学教授 町田 健

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、英語における名詞句内部と外部の統語論、すなわち名詞句の構造と分布について通時的観点から考察し、その歴史的発達を生成文法理論の枠組みにおいて説明することを目的としている。第1章では、本論文で取り扱う名詞句に関する統語現象を概観するとともに、名詞句の認可において重要な役割を果たす格の概念が、生成文法の理論的変遷の中でどのように特徴付けられてきたかを簡潔に述べている。

第2章では、名詞句を修飾する数量詞の分布、および名詞句の構造について、古英語の言語事実を中心に論じている。まず、電子コーパスを用いた調査により、古英語では現代英語とは異なり、主語だけでなく目的語を修飾する数量詞も遊離した位置に現れることができることを観察している。そして、数量詞の補部位置から名詞句が左方移動することにより数量詞が残置されるとする分析に基づき、古英語では目的語移動が存在していたために、目的語からの数量詞遊離が可能であったと主張している。

第3章では、電子コーパスを用いて古英語における目的語の分布について調査し、3種類の目的語移動、すなわち対格の認可に関係する軽動詞句領域への移動、かき混ぜタイプの時制句領域への移動、談話機能により動機付けられる補文標識句領域への移動が存在していたことを実証している。いずれの目的語移動も現代英語までに消失したが、その主な要因として、中英語において「目的語・動詞」語順から「動詞・目的語」語順へと変化したことを挙げている。

第4章では、think/seem等の述語が選択する経験者項の統語変化について考察している。電子コーパスを用いた調査により、古英語では経験者項が与格で標示されていたが、中英語にtoを主要部とする前置詞句の形式が出現したことを観察している。そして、格を構造格、内在格、語彙格の3つに分割する格理論に基づき、think/seemが経験者項に付与していた語彙格としての与格が消失したことにより、それに代わる認可方法として前置詞toが導入されたと主張している。その例外として、代名詞の経験者項は動詞に編入することにより認可されることが可能であったために、現代英語までmethinks/meseemsのような表現が残っていることが説明されると論じている。第5章では、上記の三分割格理論を二重目的語構文と与格動詞構文の歴史的発達に拡張して分析している。古英語では前者の間接目的語と後者の直接目的語は内在格としての与格を付与されていたが、中英語に内在格が消失すると一時的に前置詞句の形式を取るようになり、その後は前置詞を伴わない目的語となった。think/seemの経験者項とは異なり、二重目的語構文と与格動詞構文において前置詞句の形式が定着しなかったのは、これらの構文が軽動詞を含んでおり、それが動詞直後の目的語に構造格を付与するようになったからであると主張している。第6章では、本論文の内容の総括、本論文の経験的・理論的貢献を述べるとともに、残された問題とその可能な解決策を提示し、今後の研究動向を展望している。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

英語史において名詞句の統語法に多くの変化が起こったことはよく知られているが、従来の研究では名詞句内部と外部に関する統語変化が独立した問題として取り扱われてきた。これに対して、本論文は、名詞句の構造と分布の両面を通時的観点から論じた体系的研究であり、特に以下の2点において非常に高く評価される。

第一に、電子コーパスを用いた丹念な資料調査により、名詞句の統語変化の実像を明らかにしたことが挙げられる。第2章の数量詞に関する調査では、数量詞 *all, both, many, some* とそれが修飾する名詞句との位置関係を観察することにより、古英語では主語だけでなく目的語からも数量詞遊離が可能であったことを明らかにしている。第3章の目的語移動に関する調査では、目的語と様々な種類の副詞との相対語順を節タイプごとに詳細に調べ、古英語において3種類の目的語移動が存在したことを実証している。第4章の経験者項に関する調査では、名詞と代名詞の経験者項を区別して用例を収集し、その形式が与格から前置詞句へと変化した時期を特定するとともに、英語史を通じて代名詞の経験者項が動詞の直前に現れる傾向が強いことを見出し、代名詞が動詞に編入するという分析の妥当性を高めることに成功している。これらの調査により、英語史における名詞句の統語法の発達過程を明らかにしたことは、言語事実の発掘という経験的領域における歴史言語学に対する大きな貢献である。

第二に、生成文法理論における中心的課題である機能範疇と格について、通時的視点から新たな知見を与えていることが挙げられる。第3章の目的語移動に関する議論では、軽動詞句から補文標識句にかけて存在する機能範疇の指定部がその移動先として提案されているが、これは統語地図作成法と呼ばれる、機能範疇の階層構造を精緻化しようとする最近の研究手法と合致するものであり、共時的研究から生まれたこの研究手法が通時的研究においても有効であることを示した意義は大きい。また、第4章と第5章の格に関する議論では、三分割格理論における内在格と語彙格の区別に基づき、与格の消失が構文ごとに異なる帰結をもたらすことを見事に説明している。近年の格に関する研究では構造格に焦点が当てられることが多いが、英語史に関するデータから内在格と語彙格の重要性を示した本論文は高く評価されるべきである。

しかし、本論文の考察に問題がないわけではない。第2章と第3章の議論の大部分が古英語に関するものであり、中英語以降に起こった統語変化、およびその動機やメカニズムについての検討が十分であるとは言えない。また、論文全体として事実観察に重点が置かれていることもあり、理論的説明が不十分な箇所が散見される。しかし、これらの問題は今後の研究によって解決可能であり、丹念な資料調査に基づく名詞句の統語論に関する通時的研究である本論文の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのに相応しい水準の研究であると判断した。